自転車で商店街を抜けていく。

九月に入り、少しは涼しくなるかと思ったが、まだまだのようだ。夕方になっても蒸し暑くて、自転車で風を切っても、生ぬるい空気に包まれる。夏休みの延長にいるような子供たちが大きな声を上げて、通り過ぎる。

角を曲がり、一本奥の道に入って、いとや手芸用品店の裏に自転車を止める。カゴからエコバッグを下ろし、裏口から入る。もうすぐ閉店する時間なので、聡子さんや他のパートさんたちがレジ締めの準備をして、ゴミをまとめたりしていた。

今月末で一度店を閉めて、工事が入り、改装する。再オープンは、十一月の終わりの予定だ。店にカフェスペースを設けることになり、パートさんたちがどう思うか心配だったのだけれど、全員が「おもしろそう」と言ってくれた。工事に向けて、店の片づけをはじめているため、レジ裏には段ボール箱が積まれている。

「戻りました」段ボール箱の間を抜け、レジにいる聡子さんに声をかける。

「お帰りなさい。これ、郵便届いてるよ」

「ありがとうございます」差し出された白い封筒を受け取る。

前のアパート宛てに送られて、転送されてきたものだった。ここに引っ越してきてから、もうすぐ一年が経つ。転送期間は、一年のはずだ。差出人の名前は、知らない人だったのだけれど、住所に見覚えがあった。

「上がっても、大丈夫ですか?」

「店のことは大丈夫だから、いいよ」

「お願いします」

階段で二階に上がって台所に行き、封筒はダイニングテーブルに置いておく。買ってきたものを冷蔵庫や流しの下の棚にしまう。エコバッグを畳んでから、封筒を開く。

中には、便箋が一枚とはがきが一枚入っていた。先に便箋を読む。それは、母親と一緒に働いていたという人からの手紙だった。夏で店を閉めることになり、全ての荷物を運び出した際、従業員の使っていたロッカーの下からはがきが出てきた。何かの拍子にロッカーの裏に落ちてしまい、そのままになっていたのではないかということだった。アパートの住所は、そのはがきに書かれていた。届くかわからないと思いつつ、送ってくれたようだ。

はがきは、母親からだった。

読むか迷ったが、嫌でも内容は目に入ってしまう。お手本を写したような、あまり特徴のない文字だ。それでも、母親の字だとすぐにわかった。子供のころ、同じ文字で書かれたメモを見ながら、帰りを待ちつづけていた。はがきには、大したことが書かれているわけではなかった。「長い冬が終わり、やっと春になった」とあるので、亡くなる少し前に書いたものだろう。

去年までの僕だったら、泣いて落ち込んで、何もできなくなっていたかもしれない。もしくは、怒って、破り捨てたかもしれない。今は、冷静に受け止められる。便箋とはがきをもう一度読み、封筒に戻す。後で、木綿子さんにも読んでもらおう。

階段を上がってくる音が聞こえて、聡子さんが台所に入ってくる。

「お疲れさまです。どうかしました?」僕から聞く。

「浴衣、着るんでしょ」

「あっ、はい」

今日は、花火大会だ。

いつもよりも早めに店を閉めて、僕と木綿子さんは屋上で花火を見る。パートさんたちは、それぞれの家族と見るようだ。

木綿子さんが僕のために浴衣を縫ってくれたので、着る約束をした。帯や下駄は、おじいちゃんの使っていたものを借りる。

「自分で着れるの?」

「着れません」

「帯、結んであげるから、羽織るまでは着替えてきなさい」

「はい」

封筒はテーブルに置いておき、作業部屋に行く。テーブルに紺地の浴衣と帯が用意されていた。Tシャツとハーフパンツを脱いでから羽織る。向きがわからなかったのでスマホで調べ、右前になるように着て手で押さえ、帯を持ち、台所に戻る。

「お願いします」帯を聡子さんに渡す。

「今度、木綿ちゃんに、男性の着付けも教えておくね」

「ああ、いや、僕が自分で着れるようになります」

木綿子さんとは、春の終わるころに手を繋ぐようになってから、関係性が変わっていない。浴衣を縫いながら「着付けは、ちょっと無理かも」と言っていた。技術の問題ではなくて、気持ちの問題のようだった。採寸のために身体に触ることはある。基準がよくわからないが、嫌なことをさせるつもりはない。

聡子さんは帯を結び、細かく整えてくれる。

「はい、できた」僕の背中を軽く叩く。

「ありがとうございます」

「木綿ちゃんは、三階で自分で着てるみたいだから」

「あっ、そうなんですね」

さっき店を見た時にいなかったから、そうだろうとは思っていた。

「じゃあ、お疲れさま」

「お疲れさまです」

一階に下りる聡子さんに僕もついていく。浴衣を着るのは、子供のころ以来だけれど、意外と動きやすかった。聡子さんが出た後で裏口を閉めて、戸締りを確認する。

階段を上がり、二階と三階を通りすぎ、屋上に出る。

さっきまで、ぼんやりと明るかった空は暗くなり、夜になっていた。

白地に青い朝顔の柄の浴衣を着ている。木綿子さんが白いのもあり、夜の中で光って見えた。用意していた下駄を履き、僕の方へ歩いてくる。

「浴衣、似合うね」僕を見て、嬉しそうに言う。「和装、絶対に合うと思ってたんだ。かっこいい!」

「ありがとうございます。木綿子さんも、かわいいですよ」

「ありがとう」

お互いを褒める気持ちに、ズレがあるような気がした。木綿子さんは僕よりも浴衣よりうことも木綿子さんを見ている。寂しく感じてしまうが、別にいいとも思える。

なのだ。

花火が幸せに暮らせることが、何よりも大事らいで、見える方を向き、柵の前に立つ。あと二分く「手紙、打ち上げがはじまるだろう。「転送さ受け取った?」木綿子さんが言う。思って。

「母親か「えっ?「あの世雑なので充分な変していた

「わかっ「大丈夫

浴衣の何も言

の先に、花火が上がり、少し遅れて音が届く。の河原で上げているのだけれど、思った以上見える。成瀬も誘えばよかった。でも、さくらちゃんはまだ五ヵ月だし、落ち着いて見られないだろう。来年か再来年でも、いつか誘えばいい。

「ひかり君の名前、花火だね」花火の音に負けないように、木綿子さんは声を大きくする。

「どういうこと?」

「夜の光」

「ああ、うん」

「ごめん、嫌だった?」

「ううん」首を横に振る。

僕の考える夜の光は、月のイメージで、寂しいものだ。花火なんていう華々しいものを自分の名前だと考えたことはなかった。

「ひかり君は、わたしにとって、夜の光だったから」

「さっきよりも、わかんない」

「ひとりで生きていくと思っていたところに、現れてくれた。大きな光だった」

「お酒、飲みました?」

「飲めないし、飲んでないよ」

「急に恥ずかしいことを言うから、酔っぱらってるのかと思った」

「花火と浴衣に、ちょっと浮かれてるかも」照れたように、笑う。

母親に「わたしの大事なひかり」と言ってもらえることを、僕自身にとっても「光」だと思って生きてきた。去年、木綿子さんと出会い、彼女が「光」になった。

「僕、いつまでも夜野光でいるつもりはありません」

「何か言った?」木綿子さんが耳を寄せてくる。

「なんでもないです」

そう言って、顔を近づけると、木綿子さんは困ったような顔をして、少し離れる。

悩んでくれているのであって、絶対に無理とかどうしても嫌とかではないのだろう。

このままならば、このままでもいい。関係が進むのであれば、それでもいい。ひとつひとつ、ちゃんと話して、考えていきたい。どうなっていくとしても、いつか、できるだけ早くに「糸谷になりたい」と、伝えようと決めている。

関係性にこだわらなくてもいいし、名前なんかに頼らなくていい。

それでも、「糸谷光」が僕の本当の名前なのだという気がする。

「もう少し待ってね」花火の音が消えた瞬間に、木綿子さんが言う。

「永遠にだって、待ちますよ」

大きな花火が上がり、夜空に光が広がる。